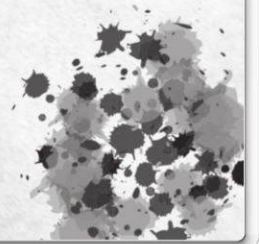




ニーチェ

～ 生の肯定者～



時代背景

主体性を失った現代人を批判して、真の自分を取り戻すように呼び掛ける[]という思想家が現れた。キルケゴール、ハイデッガー、サルトルなどが実存主義者として区分されるが、その中でも最も現代に影響を与えたとされる哲学者こそが、本日紹介するニーチェである。彼が生きた19世紀のヨーロッパでは、主体性を失い生きる意味を見出せない人々が問題視されていた。その原因は何か、またどうしたら強く生き抜いていけるかについて、主張した人物であり、彼の思想は私達の生きる希望にも繋がるものである。自分らしく生きるために必要なことを、彼の思想から学びとってこよう。

偉人の生涯

Friedrich Nietzsche 1844～1900 ドイツ 哲学者



主 著 『² 』 『³ 』
 Keyword 「ニヒリズム」「神は死んだ」「超人」「永劫回帰」

西 暦	年齢	生 涯
1844	0	ドイツのレッケンで出生
1864	20	ボン大学に入学
1869	25	驚異的な若さでスイスのバーゼル大学の教授に就任
1872	28	『悲劇の誕生』を出版
1882	38	『力への意志』の執筆を開始→ニーチェの死後、遺稿をまとめた妹が刊行
1885	41	『ツァラトゥストラはこう語った(語りき)』が完成
1889	45	精神崩壊を起こしてしまい、精神科の病院に入院
1900	56	肺炎を患い、死去

★ニーチェの真面目エピソード

まだニーチェが小学校に通っていた頃、帰りににわか雨が降ってきて、他の子供たちは傘がなく走って帰って来た。にも拘わらずニーチェは一人雨の中を頭にハンカチを載せて歩いて帰って来たという。心配して途中まで来ていた母が「何故、走ってこないのか」と怒ったところ、ニーチェは「校則に帰りは走らず静かに帰れと書いてあるから」と、述べた。このエピソードのように生真面目で慎み深い少年は、「小さな牧師さん」と呼ばれていたそうだ。



偉人の功績・思想

★「神は死んだ」

哲学はニーチェ以前と以後で分けられる。ニーチェ以前の哲学者が絶対的な真理を求めてきたのに対し、彼は「そんな絶対的なものはない！」と説いた。善や正義などもこれが正しいというものは無いし、絶対的なものが無いということは神すらも否定することになる。当時の人々は「こいつおかしいだろ…」という反応で全く受け入れられなかったという。

神への信仰すらも存在しないということを、彼は「**神は死んだ**」と表現した。やや中二病感がある。

科学が発展し、神がいなくとも説明がつく世の中になった以上、人々の心の拠り所が失われることになった。弱者は理想と現実のギャップに苦しみ、生きることへの目標や希望を失う者が現れた。19世紀のヨーロッパはまさにそんな人々で溢れかえり、^[4] **(虚無主義)**に陥っていると説いた。

★なぜ弱者が生まれてしまったのか

ニーチェは、上に挙げたような「弱者」が生まれた原因を「キリスト教道徳」にあるとした。キリスト教では現世の欲望や富・権力を否定し、道徳的に善いことを生きる価値としている。しかし、これは弱者に寄り添い、弱者を正当化するだけの考えだと批判した。弱者は強者に対して嫉妬や恐怖、不安という

^[5] **(怨恨)**を抱いており、これらを中和するために神への信仰が用いられた。

つまり、信仰は自分を守る手段に過ぎず、これでは人としての真の強さを得られないと説いた。

Work 弱者を正当化する文化は、今の日本ではどんな例があるだろう？

身の回りの出来事や、アニメ・映画などの作品、ニュースや週刊誌で報じられる出来事などを思い返すと「弱者が正しい」「強者は悪」というような文化が感じられる事例はある。どんなものが思いつくかな？弱者が同情されているような事例、弱者が強者に対しての妬みから生じる事例などを想像してみよう。

自分の考え

他者の考え

-
-
-

★超人を目指せ!

ニーチェは、神に頼らず現世の価値を自分自身で生み出そうとする姿勢(=^[6] **(超人)**)を説いた。

この意志によって**自己を肯定**し、強く生き抜くことを主張した。この理想的な人間を、^[7] **(超人)**と呼んだ。

「生きる目的が無い世界の中でも、否定的な思考を克服しよう。自己を肯定して生き抜こうぜ！」という

彼の思想は、現代の主体性を失った若者に刺さるものなのかもしれない。

死後100年以上が経った今でも多くの人に影響を与えている。



偉人から学ぶこと

Book ㊦ 『ツァラトゥストラはこう語った』から学ぶ生き方①

彼の著ともいえる『ツァラトゥストラはこう語った』は、ツァラトゥストラというおじさんの主人公が人々に対して問いかける形で展開する。この主人公こそがニーチェの分身のような存在で、彼が伝えたかった思想を垣間見ることができる1冊となっている。

Case 1 誹謗中傷に苦しむ人へ

悲劇やら闘牛やら磔(はりつけ)の公開処刑を見て、人間はこれまで地上で最大の快感を味わってきた。人間が地獄を考え出したとき、どうだろう、それは地上における人間の天国ではなかったか？偉大な人間が苦痛の叫びをあげると、小さな人間がちまちま寄り集まってくる。そして快感にうずうずして、舌なめずりする。しかもそれを自ら「同情」と称する。

逃れなさい、あなたの孤独の中へ！あなたはこのちっぽけな、みじめな者どもに、あまりに近づいて生きてきた。あなたに対して彼らに加えるものは、復讐以外の何物でもない。彼らに向かって、もはや腕を上げるのはやめなさい！彼らは無数なのだ。蠅叩きになるのはあなたの運命ではない。

(『ツァラトゥストラはこう語った』より 一部改編)

Q ニーチェはこの話で、人間の本性をどのように説いているだろうか？

【ヒント】「優れた人間」「苦しみ」「嫉妬」「正義感」「正当化」などの単語を使ってまとめましょう。

劣った人間は、

現代問題となっているネットやSNSでの誹謗中傷も、この話に繋がるのではないだろうか。自分の人生に納得が行かない人が痛みを和らげるため、優れたものを悪と考え正義感を振りかざす。「人間はこうあるべき」「常識はこうだ」と正論を振りかざし、ここぞとばかりに優れた人を叩く。こうして自分が正しいと酔いしれるのである。そしてそんな人間は仲間が仲間を呼び、弱者たちの傷の癒し合いのためにどんどん人が集まってしまう。ネットの普及により拡大速度はさらに上がっている点が現代の誹謗中傷の怖いところである。

ニーチェが言うように、これはハエのように無数に湧いてくるもの。

戦うだけ無駄なんだと無視して欲しい。屈することなく、自分が信じた道を進み続けよう。そして、ハエ側の立場には絶対にならないで欲しい。エネルギーは自己に向けるべきものである。

Book📖 『ツアラトゥストラはこう語った』から学ぶ生き方②

作中に描かれた出来事は何を意味しているのだろうか？想像しながら読んでみよう。

Case 2 自分の人生は自分で作れ！

作中で主人公は、のどに蛇を詰ませた牧人と出会う。牧人は息が詰まり、今にも死んでしまいそうなので、助けようと蛇を引き抜こうとした。しかし、一向に蛇は抜けず、牧人にこう伝えるのである。「頭をそのままかみちぎれ！」すると、かみちぎられた蛇の頭が出てきて、牧人は一命をとりとめた。苦しみから逃れた彼は、いまだかつて見たことが無いような最高に晴れやかな笑顔を見せていたという。

(『ツアラトゥストラはこう語った』より、作中のシーンを要約)

Q ニーチェはこの話で、どんなことを伝えたかったのだろうか？

【ヒント】これまで学んだニーチェの思想から連想してみよう。



・息苦しい牧人＝

・蛇の頭をかみちぎる行為＝

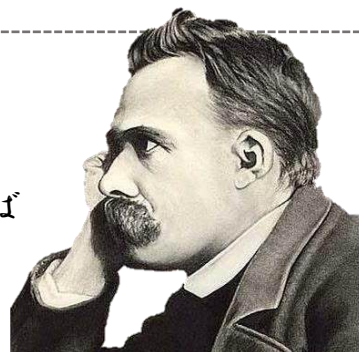
ニーチェは、宇宙の万物は永遠に同じ過程を繰り返していると考えていた(=[⁸])
つまり、人生においても前世や来世というものは無く、自分の人生が永遠に繰り返されると説いた。
だからこそ、どこかで自分の生き方を変えていかなければならないのだ。否定的な思考を克服し、
この牧人のように勇気をもって立ち上がらなければならないのだと、伝えたかったのだろう。
「どうせ私なんか」「頑張っているのに報われない」「生きる意味が無い」という思考は捨て、
これこそが人生だ、これこそが自分なんだと**自己を全肯定すること**。

これにより、自分は永遠に肯定され続けることになる」と説いた。
生きることに迷い苦しんでいる人がいたら、ニーチェはこう言うだろう。

死にたくなるほどの絶望があっても、これこそが人生だともう一度立ち向かう勇気を持とう。
起こること全てを運命として受け入れ、その運命を愛せよ(=[⁹])

たった一度でもいい

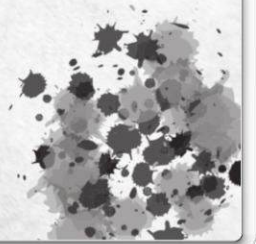
本当に魂が震えるほどの喜びを味わったのならば
その人生は生きるに値する





ニーチェ

～ 生の肯定者～



時代背景

主体性を失った現代人を批判して、真の自分を取り戻すように呼び掛ける^[1] **実存主義** という思想家が現れた。キルケゴール、ハイデッガー、サルトルなどが実存主義者として区分されるが、その中で最も現代に影響を与えたとされる哲学者こそが、本日紹介するニーチェである。彼が生きた19世紀のヨーロッパでは、主体性を失い生きる意味を見出せない人々が問題視されていた。その原因は何か、またどうしたら強く生き抜いていけるかについて、主張した人物であり、彼の思想は私達の生きる希望にも繋がるものである。自分らしく生きるために必要なことを、彼の思想から学びとっていこう。

偉人の生涯

Friedrich Nietzsche 1844～1900 ドイツ 哲学者



主 著 『² **力への意志** 』 『³ **ツァラトゥストラはこう語った** 』
 Keyword 「ニヒリズム」「神は死んだ」「超人」「永劫回帰」

西 暦	年齢	生 涯
1844	0	ドイツのレッケンで出生
1864	20	ボン大学に入学
1869	25	驚異的な若さでスイスのバーゼル大学の 教授に就任
1872	28	『悲劇の誕生』を出版
1882	38	『力への意志』の執筆を開始→ニーチェの死後、遺稿をまとめた妹が刊行
1885	41	『ツァラトゥストラはこう語った(語りき)』が完成
1889	45	精神崩壊を起こしてしまい、精神科の病院に入院
1900	56	肺炎を患い、死去

★ニーチェの真面目エピソード

まだニーチェが小学校に通っていた頃、帰りににわか雨が降ってきて、他の子供たちは傘がなく走って帰って来た。にも拘わらずニーチェは一人雨の中を頭にハンカチを載せて歩いて帰って来たという。心配して途中まで来ていた母が「何故、走ってこないのか」と怒ったところ、ニーチェは「校則に帰りは走らず静かに帰れと書いてあるから」と、述べた。このエピソードのように生真面目で慎み深い少年は、「小さな牧師さん」と呼ばれていたそうだ。



偉人の功績・思想

★「神は死んだ」

哲学はニーチェ以前と以後で分けられる。ニーチェ以前の哲学者が絶対的な真理を求めてきたのに対し、彼は「そんな絶対的なものはない！」と説いた。善や正義などもこれが正しいというものはないし、絶対的なものが無いということは神すらも否定することになる。当時の人々は「こいつおかしいだろ…」という反応で全く受け入れられなかったという。

神への信仰すらも存在しないということを、彼は「**神は死んだ**」と表現した。やや中二病感がある。

科学が発展し、神がいなくとも説明がつく世の中になった以上、人々の心の拠り所が失われることになった。弱者は理想と現実のギャップに苦しみ、生きることへの目標や希望を失う者が現れた。19世紀のヨーロッパはまさにそんな人々で溢れかえり、^[4] **ニヒリズム**](**虚無主義**)に陥っていると説いた。

★なぜ弱者が生まれてしまったのか

ニーチェは、上に挙げたような「弱者」が生まれた原因を「キリスト教道徳」にあるとした。キリスト教では現世の欲望や富・権力を否定し、道徳的に善いことを生きる価値としている。しかし、これは弱者に寄り添い、弱者を正当化するだけの考えだと批判した。弱者は強者に対して嫉妬や恐怖、不安という

^[5] **ルサンチマン**](**怨恨**)を抱いており、これらを中和するために神への信仰が用いられた。

つまり、信仰は自分を守る手段に過ぎず、これでは人としての真の強さを得られないと説いた。

Work 弱者を正当化する文化は、今の日本ではどんな例があるだろう？

身の回りの出来事や、アニメ・映画などの作品、ニュースや週刊誌で報じられる出来事などを思い返すと「弱者が正しい」「強者は悪」というような文化が感じられる事例はある。どんなものが思いつくかな？弱者が同情されているような事例、弱者が強者に対しての妬みから生じる事例などを想像してみよう。

自分の考え

大物政治家や大御所芸能人のスキャンダルを、これでもかと叩くメディア

他者の考え

- 何回も連続で優勝するスポーツチームが嫌われる**
- 金持ちに対して風当たりが強い**
- 正義の味方を扱う作品は、弱くても強敵に最後は勝つパターン**
- アンパンマンやゴム人間のルフィなど、弱い能力で強敵を倒すことがカッコいい**

★超人を目指せ!

ニーチェは、神に頼らず現世の価値を自分自身で生み出そうとする姿勢(=^[6] **力への意志**])を説いた。

この意志によって自己を肯定し、強く生き抜くことを主張した。この理想的な人間を、^[7] **超人**]と呼んだ。

「生きる目的が無い世界の中でも、否定的な思考を克服しよう。自己を肯定して生き抜こうぜ!」という

彼の思想は、現代の主体性を失った若者に刺さるものなのかもしれない。

死後100年以上が経った今でも多くの人に影響を与えている。

偉人から学ぶこと

Book ㊦ 『ツァラトゥストラはこう語った』から学ぶ生き方①

彼の名著ともいえる『ツァラトゥストラはこう語った』は、ツァラトゥストラというおじさんの主人公が人々に対して問いかける形で展開する。この主人公こそがニーチェの分身のような存在で、彼が伝えたかった思想を垣間見ることができる1冊となっている。

Case 1 誹謗中傷に苦しむ人へ

悲劇やら闘牛やら磔(はりつけ)の公開処刑を見て、人間はこれまで地上で最大の快感を味わってきた。人間が地獄を考え出したとき、どうだろう、それは地上における人間の天国ではなかったか？偉大な人間が苦痛の叫びをあげると、小さな人間がたちまち寄り集まってくる。そして快感にうずうずして、舌なめずりする。しかもそれを自ら「同情」と称する。逃れなさい、あなたの孤独の中へ！あなたはこのちっぽけな、みじめな者どもに、あまりに近づいて生きてきた。あなたに対して彼らに加えるものは、復讐以外の何物でもない。彼らに向かって、もはや腕を上げるのはやめなさい！彼らは無数なのだ。蠅叩きになるのはあなたの運命ではない。
(『ツァラトゥストラはこう語った』より 一部改編)

Q ニーチェはこの話で、人間の本性をどのように説いているだろうか？

【ヒント】「優れた人間」「苦しみ」「嫉妬」「正義感」「正当化」などの単語を使ってまとめましょう。

劣った人間は、**優れた人間を攻撃することで自分を正当化する。**
優れた人間への嫉妬から、過剰な正義感を振りかざす。

現代問題となっているネットやSNSでの誹謗中傷も、この話に繋がるのではないだろうか。自分の人生に納得が行かない人が痛みを和らげるため、優れたものを悪と考え正義感を振りかざす。「人間はこうあるべき」「常識はこうだ」と正論を振りかざし、ここぞとばかりに優れた人を叩く。こうして自分が正しいと酔いしれるのである。そしてそんな人間は仲間が仲間を呼び、弱者たちの傷の癒し合いのためにどんどん人が集まってしまう。ネットの普及により拡大速度はさらに上がっている点が現代の誹謗中傷の怖いところである。

ニーチェが言うように、これはハエのように無数に湧いてくるもの。戦うだけ無駄なんだと無視して欲しい。屈することなく、自分が信じた道を進み続けよう。そして、ハエ側の立場には絶対にならないで欲しい。エネルギーは自己に向けるべきものである。

Book📖 『ツァラトゥストラはこう語った』から学ぶ生き方②

作中に描かれた出来事は何を意味しているのだろうか？想像しながら読んでみよう。

Case 2 自分の人生は自分で作れ！

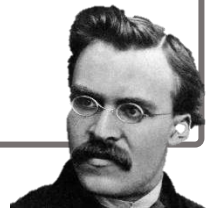
作中で主人公は、のどに蛇を詰ませた牧人と出会う。牧人は息が詰まり、今にも死んでしまいそうなので、助けようと蛇を引き抜こうとした。しかし、一向に蛇は抜けず、牧人にこう伝えるのである。「頭をそのままかみちぎれ！」すると、かみちぎられた蛇の頭が出てきて、牧人は一命をとりとめた。苦しみから逃れた彼は、いまだかつて見たことが無いような最高に晴れやかな笑顔を見せていたという。

(『ツァラトゥストラはこう語った』より、作中のシーンを要約)

Q ニーチェはこの話で、どんなことを伝えたかったのだろうか？

【ヒント】これまで学んだニーチェの思想から連想してみよう。

**あなたを取り巻く苦しみを、思い切って振り払ってみよう。
考え方を变えて前向きに進むことが出来れば、人生は晴れやかになる。**



・息苦しい牧人＝ **自分を取り巻く執着に、苦しんでいる人間**

・蛇の頭をかみちぎる行為＝ **それらの執着を捨て去り、自分の人生を前向きに進む決断**

ニーチェは、宇宙の万物は永遠に同じ過程を繰り返していると考えていた(=[⁸ **永劫回帰**])
つまり、人生においても前世や来世というものは無く、自分の人生が永遠に繰り返されると説いた。
だからこそ、どこかで自分の生き方を変えていかなければならないのだ。否定的な思考を克服し、この牧人のように勇気をもって立ち上がらなければならないのだと、伝えたかったのだろう。
「どうせ私なんか」「頑張っているのに報われない」「生きる意味が無い」という思考は捨て、
これこそが人生だ、これこそが自分なんだと **自己を全肯定すること**。

これにより、自分は永遠に肯定され続けることになる」と説いた。
生きることに迷い苦しんでいる人がいたら、ニーチェはこう言うだろう。

死にたくなるほどの絶望があっても、これこそが人生だともう一度立ち向かう勇気を持とう。
起こること全てを運命として受け入れ、その運命を愛せよ(=[⁹])

たった一度でもいい

本当に魂が震えるほどの喜びを味わったのならば
その人生は生きるに値する

